

現代日本語における否定に関わる副詞の類義表現の研究

—コーパスに基づく副詞の意味記述の試み—

要旨

本研究は日本語の副詞の意味を究明することを目的としているものである。

日本語の文の意味を理解し相手の気持ちを推し量ろうとする時、副詞は大きな手がかりとなる。それは、副詞に話し手の意図や感情が凝縮されていることが多いからである。一方、副詞というものは修飾語という位置づけであり、形式の面からも、意味からの面からでも、分類しきれない、実に用法が多様である。そして、一口に副詞といっても、いろいろなものの中に入っており、一直線の基準では規定できない、整理しにくい面がある。その副詞を文法における品詞分類のゴミタメとされている(千野(1984))。特に、非母語話者の日本語学習者にとっては習得上の難点の一つで、その細かいニュアンスが汲み取れないことで誤解することが多い。また、副詞の用法が難しいため、学習者が間違っ使用することを恐れて回避する傾向がある。

そこで、本研究の前身である修士論文では、日本語教科書の中の副詞全般についてどのような問題があるのかに焦点を当てて論じた。方法としては中国で出版され今でもよく使われている教科書『新編日語』の中に扱われている全ての副詞 69 個を対象にした。質問紙調査法を用い、『新編日語』全 4 巻に出てくる副詞 (69 個) の例文 282 例について、22 名の日本語母語話者にネイティブチェックを依頼し、①五つの類義語の中から教科書の副詞が選択されるか否かを問う「適切な副詞の選択」、②教科書の副詞が選ばなかった場合、なぜ選ばれなかったのか、その理由を「原因表」に基づき選んでもらう「原因探求」の 2 段階に分け、調査を行った。そして、調査結果をもとに、不自然な原因を分類し、考察を行った。その結果、『新編日語』では、副詞の提示の際、意味的整合性、文法的な共起関係、文体的整合性の面で、例文そのものと副詞との間に齟齬が見られ、それが不自然さの原因になっていることが明らかになった。また、中国語にも同形の漢語副詞があることによる意味上、文体上の母語の転移・干渉が見られた。

しかし、一つ、大きな課題が残った。それは類義表現として扱った否定と呼応する副詞の一部は複数選択だったため、なぜ一つの文に同じ意味で複数の副詞が使えたのか、その違いは何なのかという原因解明に至らなかったのである。結果について調査協力者何名かにインタビューを行い、なぜ複数選択したのかと質問したが、単文だけだと、どれも使えないこともない、むしろいずれも最も適切な選択とも言えるほど、はっきり違いがないということだった。調査協力者は母語話者として無意識に使いこなしているはずだが、かなり類義性が高い表現になると、その違いはただ内省に頼るだけでは使い分けの分析は難しいこともあると言える。その傾向は全体の副詞の中で、否定と呼応する副詞の類義表現に顕著であった。日本語にはこれらの否定と呼応する副詞が類義表現としていくつか存在しているが、中国語に一一対対応する否定と呼応する表現はなく、訳し方も日本語の「多数」対中国語の「一」というカテゴリー

に入っている。そこが日本語学習者にとって習得しにくいところである。

したがって、類義的な関係にある、否定と呼応する副詞はそれぞれどのような意味用法を持っているのか、お互いの間にどのような異同点があるのだろうか。そして、日本語母語話者の内省法ではなく、そして、言葉で言葉を説明するのをできるだけ簡潔にし、他の何か適切な方法で、副詞の意味用法を明らかにする方法はないのか。そこで、博士論文では、この否定と呼応する副詞を対象に、コーパス（データ）に基づく言語事実から分析を行うことにした。

具体的に選定作業は 3 つの理由で対象副詞を選んだ。①修士論文の残り課題としての否定と呼応し、日本語教科書によく説明される副詞を対象に、②入れ替えという文法方法がやや適用しにくい、類義の度合いが高い副詞にした。そして、③類義表現を比較することによる意味・用法の違いを明確にしたいため、2 つずつ比べるという便宜上のパターン数の限度を考え、1 つの類義カテゴリーに副詞を 4 つに 1 組にしている。そして、意味上から 3 段階に、「完全否定」「部分否定」「困難否定」というカテゴリを設け、本論で扱う副詞の数は 12 個になるのである。定義上の解釈を省くため、「完全否定」の中の 4 つの副詞、「ぜんぜん」「まったく」「すこしも」「ちつとも」があり、一番よく親しまれる「ぜんぜん」をタイトルにし、「ぜんぜん類」を名づける。同じ考えで、「部分否定」の中の 4 つの副詞、「あまり」「そんなに」「それほど」「たいして」の中から用例数が最も多い「あまり」をタイトルにし、「あまり類」と名付ける。同様に、「困難否定」を表す「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」を含め、「なかなか類」

本研究の意義は、主に 3 点あげられる。

第一に挙げられるのは、上述したように、類義的な関係にある否定と呼応する副詞の実態がまだ明らかになっていないということである。それは日本人母語話者であれば、はっきり説明できなくても、使い分けが自然にできるので、あまり問題が生じないのは確かである。しかし、日本語学習者が増えている現在、そのような問題の解決の必要性は増してきている。日本語学習者は特に上級レベルになると、日本語の表現を使いこなしたい、きちんと自分の気持ちを表したいと思うようになる。類義表現の使い分けを知りたいと思うのも当然のことであろう。それで、今までそれほど重視にされていない、非常に類義的な関係にある表現の異同点を明らかにすることが大きな意味を持つようになったといえる。

2 番目に挙げられる本研究の意義は、コーパスに基づく副詞全般の客観的分析方法の確立である。それらの非常に意味が近い副詞の表現は内省に頼っては明らかにすることが難しいということは修士論文の調査結果によって示唆された。また、今まで主に行われた副詞の研究方法としては同じ文に類義表現に入れ替えてみて、非文になるか、不自然になるか内省で判断して、その原因を見出す方法がよく使われている。しかし、非常に意味が近い表現になると、同じ文でも不自然さを感じないことが多い。そうになると、どのような方法を取ればこの問題が解決できるのだろうか。ここで、一つ有効な方法と考えられるのは大量の実例を集め、詳細に比較することである。日本語に関する分野でも大量の、且つ信頼性が高いデータの必要性が認識されている状況を受けて、国立国語研究所によって『現代日本語書き言葉

均衡コーパス』(BCCWJ) が構築されつつある。これは大量の人的、物的リソースと時間を費やし、今までない規模で構築された、最も信頼性が高い言語データのコーパスだと言える。その大量の言語データを用い、方法の妥当性を十分検討したうえで、数量化できるところを点数化にすることによって、内省も効かない非常に意味が近い、否定と呼応する副詞の意味用法を明らかにすることができることが予想される。本研究は類義表現の意味用法などを明らかにするために、コーパスを用いその有効性と限界性を試し適切な研究方法を見つける面にも大きな意義を持っていると思われる。

そして3点目としては、本論文の延長線にあるように思われるが、副詞全般の整理のための一貫性のある方法を見つけるのに役立つことが期待される点である。既に鈴木一彦(1959)が副詞の分類が一貫性を持っていないと指摘しているように、日本語の品詞の中で、いずれの文法理論においても、その境界がはっきりせず、品詞が確定しづらいものは、副詞・連体詞・接続詞・感動詞の四つである。これらのうち、副詞と名づけられる品詞については、最も問題が多く、古来多くの議論がなされて来ている。副詞に焦点を合わせ、これを整理し分類しようという試みが数多くあった。その中に杉山正世(1956)の「副詞の境界線」、井上博嗣(1956)の「副詞と連体詞」、渡辺実(1957)の「品詞論の諸問題」等があげられる。しかし、これらの論は一貫した基準を持たずにいくつかの副詞群を処理していたり一定の基準があってもそれが一部のものについての境界線を示しているにすぎないと思われる。未だに副詞全般の整理はできていないままだといっても過言ではあるまい。

そこで、本研究は否定と呼応する12個の類義表現の副詞(3分類、「ぜんぜん」類「ぜんぜん」「まったく」「すこしも」「ちっとも」の4つ・「あまり」類「あまり」「そんなに」「それほど」「たいして」の4つ・「なかなか」類「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」の4つ)を扱い、コーパスを用い、副詞の意味用法を大量のデータを定量的に処理することによって、意味用法などの使い分けを明らかにすることを目的とする。そして、コーパスの方法の妥当性かつ有効性がその12個の副詞によって証明されるのなら、他の類義表現の副詞についても同じ方法を用い、意味用法の使い分けを見出すことが考えられる。本研究はこの意味で方法論の検討を第二の目的とする。

本研究のこの第二の目的は、日本語学習者の副詞(の意味)の習得方法論の確立にある。本研究の方法を利用し、副詞の意味解釈がある程度できる。と同時に、使っている方法は学習者がこの方法を使えば、自ら副詞の意味が分かるように、単に文を読み、勘を養うだけではなく、全体的に一つの副詞が分かってくるように研究方法の試行錯誤もした。結果、本論の集計方法を2種類にすることになった。副詞を調べる際、修飾の係先の述語を調べるのがもっとも簡単な、わかりやすい道である。問題は今までの係先を語彙素レベルに戻って調べるという一般的な方法だけではいいのかという問題にぶつかった。本論文も語彙素に戻して副詞の係先の述語を調べた。ところが、特徴が強い副詞に対しては、本研究で扱う3組の副詞の最後の「なかなか」類(困難の意を表す「なかなか」「とても」「とうてい」「どうしても」)に対しては、可能形との共起は80%以上で、どうしても可能形を無視して、語彙素で集計するのが違和感を覚え

る。そこで、学習者という対象を念頭に入れ、あえて、特徴がそこまで顕在ではない「ぜんぜん」類と「あまり」類と違う集計の方法を試した。「なかなか」類は係先を集計する際、述語を語彙素に還元するのではなく、生じ形で元の形で集計した。一見一貫性が見慣れない方法を用いているように見えるが、方法論の確立の面でも、むしろ、本論文では進んで今までの方法を利用していながらも、対象者（学習者）の特別性を考え、別の方法も試したという点は、学習者でもある筆者のこだわりであり、そして、学習者自らの学習能力を高めるプロセスを探るという面では、今までの主流としての非母語話者の日本語研究としての母語を対象にする対照研究、学習者の日本語の習得困難点の調査という非母語話者らしい研究と並びに、日本語の既成する資源（辞典・コーパス）を借りる本研究のスタイルもまさに、解決型の学習者なりにできる研究にもなっていることを考えられる。

全体の論文の構成として、4部に分かれている。第Ⅰ部は問題意識を言及し、先行研究を踏まえる。第Ⅱ部はコーパスのBCCWJらしい、大量データの傾向調査を行い、副詞の類義表現の違いについて肯否率・ジャンルと係先の述語違いから傾向を見た。第Ⅲ部は質への昇華する段階に上る。細かい文法項目の違いを、学習者でもできる方法で、得点化した。これらの事実から、副詞とはどう捉えるかを考えたい。従来副詞に関する考え方を賛成していながら、本研究のデータを用い論証した事実から、3つの二次元軸論を提唱する。副詞の文体を考える際に、「硬度」と「くだけ度」の交差であり、副詞の心情については、「相手軸」と「自己軸」のブレンドで、そして、副詞の程度性の中には「純粹程度」と「評価性程度」が存在すると結論を結びついたのである。